

## まえがき

著者	谷浦 孝雄
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
シリーズタイトル	アジア工業化シリーズ
シリーズ番号	13
雑誌名	アジア工業化の軌跡
ページ	iii-iv
発行年	1991
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00018129">http://hdl.handle.net/2344/00018129</a>

## まえがき

本書は、アジア経済研究所が1986年度から実施している「アジア工業化展望総合研究」事業(本書の奥付裏の説明文参照)の一環として進められてきた国際産業構造研究会の最終年度の成果を取りまとめたものである。

国際産業構造研究会は各年度の成果としてこれまでに『アジアの工業化——高度化への展望』、『アジアの工業化——貿易摩擦への対応』、『アジアの工業化と直接投資』、『アジアの工業化と技術移転』など4冊の報告書を刊行した。各報告書の題名からも知られるように、アジアの工業化と先進国との係わりという側面において見い出されるいくつかの主要な項目を逐次分析してきた。

当初、90年度においては、これまでの分析結果を踏まえて、今日までのアジアの工業化の実績を総括すること、特に国際化の側面——先進国と途上国間の経済交流、企業間結合、国際分業、地域経済化(地域経済圏の形成)等——から総合的に検討し、将来展望を試みることを目的とした。

しかし、アジアの工業化はまさに現在進行形の現象であり、とりわけ80年代終盤のASEANや中国では、われわれの予想をはるかに超えた激しい動きがみられる。さらに90年以降の世界経済は従来の枠組みを崩壊させ、その余波はアジアにも及ぼうとしている。一方、われわれの実証的な研究は、実際から数年たった後にはしか確定されない統計に依存する度合いが大きい。実感でとらえた動きを具体的な数値で確認し、展望につなげるには時間がかかる。また、手持ちの資料による総括や展望はすでに時代遅れになって

いるかも知れない。

上のような認識のもとに本書では、敢えて国際化の側面にこだわることなく、アジアの工業化に関する現時点での評価、問題点、今後の展望等をさまざまな視点から、敢えて実証性に欠けることを恐れず、論ずることとした。いわば大胆な仮説を提示することによって、今後の紆余曲折が予見されるアジアの工業化を見通す足掛かりにしようというのである。

ところでわれわれが検討したのは、進行している工業化そのものである。工業化それ自体に問題がないというのではないが、全体としては光の部分、動いている部分、ダイナミズムに溢れている部分である。本当の問題は影の部分、停滞し、気力が失われた部分にある。工業化によって非工業部門、特に農業・農村はどのような変化を蒙っているのか、工業化のダイナミズムから取り残された他のアジア地域にはどのような道が考えられるのか。前者と後者の関係はどうなるのか。これらの問題には手さえ付けられなかったのが実情である。

アジア・太平洋地域はいま躍動に満ちた地域として注目を浴びている。工業化という枠組みを通じてそのダイナミズムを把握し、行き着くところを見ようとしてきた。アジア経済の巨大なうねりを感じながらも、楽観ばかりしてられないというのが取りあえずのわれわれの結論である。

1991年3月20日

編者